# 『狂雲子の書』（二）

中村素堂

なかに、来るといつでも値の張ったものを買ってくれる上客の病院長さんがある。ところがその奥さんは骨董品が大嫌い、どこの誰が使ったか判らないものだ、不潔だで、いつでも奥さんの留守か、さもなければ番頭や使いのものが外来患者になって待合室で順を待ち、しかるべく持ち込むという仕掛けで納めるんだという。ところがその病院が品川の方にある花やなぎ病専門の病院なので、持ち込む番頭や小僧さんがイヤがることひと通りではない。

とうとう暮らしに困らない主人だから、マアご覧になっても減るもんじゃありませんから、あんな無理をしてお買い上げ下さらなくてもいいから、ご遠慮なくお茶を喫みにいらっして下さい——とご辞退に出た。

すると院長先生憮然として、「そんな惨酷なことをいうもんじゃないよ、君。俺なんか一日中ロクなものを見てないんだ。余暇にはまあすがすがしいものを見てたのしみたいんだ」とおっしゃる。そして禅僧の墨蹟とか志士の辞世とか凛然たる風格のものばかり依然として買って下さる。

「狂雲はこれ狂雲の法をもちう」と漢字七字の一行ものの颯爽たる立軸が店に掛けてある。署名も狂雲子とある。

この軸を前にして茶菓をつまみながら三人の客がある。甲曰く、「これは何と読むんですか」。乙曰く「これは何でしょう。暴風雨の時には暴風雨に対する準備をする、という意味でしょう」。丙曰く「違いますね。一風変わったやつは当然狂った方法で暮らしてゆくもんだ、という意味でしょう」とやらかす。

主人禿げた部分だけ静かに後ろへ撫でて「毎日方々の会社の重役さん方がお見えになりますが、この筆者の狂雲子という方は、もと気象台におられた何とか博士の戯れの雅号で、やっぱり何か天候異変の時にはそれ相応の手配をするべきだということだろうとおっしゃっていました」とみごとな結論を提出した。そこへ花やなぎ病院長と、そのご友人の通人お二人がご入来。遠目に見ること一分。この軸をくれと、甲乙丙氏を尻目に安い言い値で買いとってしまった。そこで乙氏おそるおそる「これは誰の書でございますか」と訊く。通人氏、「これは間違いなく一休禅師ですヨ。一休は狂雲子という号ですから、この句はわが輩はわが輩の信念でやるんじゃというんでしょう」とやる。院長曰く「そういえば一休の詩集は『狂雲集』といいましたナ」と追討ちをかける。

大損をした主人は、またその想定損害額を何かに乗っけるんじゃないか——と甲乙丙氏、通とか、はんか通とかより、その方を心配していた。

〈『仏教書道』、昭和四十一年三月〉

随處爲主（虚堂録）
（昭和五十七年）